

母の死

20年前——私が7歳のとき。

家の近くで一人の女性が亡くなった。最初は飛び降り自殺だと聞いた。

その次に聞いたのはこんな話だった。

彼女は嘆きのダイヤに呪われたのだ。あの人は呪われたダイヤを持っていて、そのダイヤに魂を吸い取られたのだ。

そんな恐ろしいことがあるのかと姉さんに聞くと、そんなのは全部嘘だと教えてくれた。それで少し安心したけど、やっぱり怖さも少しあった。

最後に聞いた話はこうだ。

彼女は殺された。犯人は阿望^{りんよう}燐葉——私の母さんだ、と。

亡くなった女性が人殺しと叫ぶのを聞いた人がいるのだという。その近くで慌^{あわ}てて逃げ去る母さんの姿を見た人がいるのだとも聞いた。

そんな訳がないと思った。あの優しい母さんがそんなことをする訳がない。

でも——母さんは私の目の前で警察に連行されていった。

まだ幼かった私は、どうすれば母さんが戻ってくるのかを考えた。図書館に行って、司書^{ほしやくきん}さんに聞いて、それで保釈金という言葉を知った。

お金があれば母さんは戻ってくるのだ！

そう思った。同時に、家にお金がないから母さんが帰ってこないのだと思った。

今ならそれが間違っていることは、弁護士の姉さんでなくてもわかる。殺人のような重い犯罪の場合、通常保釈が認められることはないのだ。

母さんが帰ってきたのはそれから2カ月後だった。女性が飛び降りるのを目撃した人物が現れ、誤認^{ごにん}逮捕だったことを警察が認めたのだ。

母さんは落下現場に出くわしたが、ショックで通報するのを忘れ、その場を去ってしまっただけだという。

それでも世間の噂は変わらなかった。

警察の発表は小さく小さく新聞の隅に載^のったっきりで、出歩けば周りの人が母さんを見て距離を取った。人殺しだとひそひそ囁^{ささや}き合っていた。

母さんが亡くなったのはそれから半年後だった。元から体が弱かったのに加え、拘置生活の負担^{こうち}が祟^{たた}ったのだろう、と医者は言っていた。

それを聞いたとき、私は思った。

もっとお金があれば母さんを助けられたのに。

その勘違いは、大人になった今もずっと消えてくれない。

父からの呼び出し

父——阿望^{つよし}剛から連絡があったのは今年の11月のことだった。

宝石展を開くから手伝いを頼みたい。それが父の頼みだった。

もちろん私は無理だと返事をした。11月は税理士^{ぜいりし}にとっての繁忙期^{はんぼう}だ。法人クライアントの決算月が9月。それから2カ月以内に法人税・消費税等の確定申告書を提出しなければいけない。

しかし父は頑^{かたく}なだった。実際の手伝いは12月からでいいと譲歩^{じょうぽ}してきたが、12月は12月で年末調整の仕事がある。私がそう返事すると、一生の頼みだからと言ってくる。

堇^{きんせい}青も来ることになったから、と父から聞いたときに私も折れた。弁護士として忙しい姉さんまで来るとなれば、私だけ手伝わないという訳にもいかない。

年末調整の仕事は事務所の先輩に引き継いでもらい、私は父のもとへ向かった。

宝石展が開かれるのは温泉地^{はこね}として有名な箱根の美術館だった。

東京からでも2時間あれば行くことができる。このあたりの宿はどこも高いので、東京から通うことにしようと思っていたのだが、既に父がその中でも高級な旅館を手配していた。

旅館には家族が揃っていた。父と、それから私を含めて4人の兄弟姉妹。年末年始と母の命日以外で家族が揃うのは珍しいことだった。

到着した晩——12月の初めだったが、家族で夕食を囲んだ。日長^{にっちょう}兄さんは「久しぶりに高いものが食えるぜ」と言って上機嫌^{げっちょう}だったが、私と月長^{げっちょう}は違った。

私はまず父が勝手に宿を取ったことに怒っていた。東京からの通いでいいし、宿を取るにしてももっと安いところがある。無駄遣^{ぶだち}いだ——とお金に過敏^{かびん}になるのは、私にとってアレルギー反応みたいなものだ。でも、こればかりは自分でも変えられない。だから職業にしたのだ。

月長は仕事が心配で食事が進まないようだった。父の会社——阿望工業を継ぐ修行中の身である月長は、どうも会社の様子が気になって仕方がないという様子で、しきりに自分のスマホを確認していた。

姉さんはあまり変わったところがなかったが、わざわざ高そうな日本酒を持ち込んでいるあたり、存分に羽を伸ばすつものようだった。弁護士の仕事も大変なのだろう。

そして父はと言えば、そんな私達の様子を見てにこにここと微笑^{ほほえ}んでいた。

嘆きのダイヤ

家族の間に不穏な空気が流れ始めたのは、12月の中旬。

本格的に宝石展の準備が始まった頃だった。

まず私達は会場の設営と展示会の宣伝に着手した。私の仕事は設備の調達。他はスタッフの調達を兄さん、会場レイアウトやシフトの決定を月長、宣伝を姉さんが担当するという内訳だった。

作業を初めてすぐ、私達はこの宝石展の目玉を知るようになった。

嘆きのダイヤ——呪われたブルーダイヤモンド。

母さんが誤認逮捕された事件で、飛び降り自殺した女性が持っていたダイヤ。

それをどうして父が手に入れ、宝石展の目玉に据えようとしているのか。私には理解できなかった。それは母さんの^{かたき}仇と言ってもいい宝石なのだ。

もちろん父に理由を尋ねたが、父は「あれは私にとって、私たち家族にとって特別なダイヤなんだ」と言うだけだった。

年の明けた1月初め。

嘆きのダイヤを展示するメインホールが少し物足りないということで、私は輸入品の安くて大きなシャンデリアを購入した。

1月10日、シャンデリアをメインホールに設置して会場の設営は完了した。

怪盗ホープの予告状

1月中旬から始まった宝石展は、さほど賑わいはしなかったが、特に問題が起きることもなかった。

それが突然^{ものの}物々しくなったのは、2月1日のことだ。

嘆きのダイヤを貰い受ける——怪盗ホープからの予告状が届いたのだ。

怪盗ホープと言え、半年ほど前から^{ちまた}巷を騒がせている美術品泥棒だ。なんでも変装の達人であり、警察でもその正体は掴^{つか}めていないという。

すぐに刑事と、それからダイヤに掛けてあった盗難保険の担当者が集められた。

この担当者というのがこれも変わった人物で、^{いぬぼうざき}犬吠埼瑠璃という保険会社に雇われた探偵だった。

そもそもは嘆きのダイヤの盗難対策を完璧にしたいという父の要請を受け、盗難保険の会社が彼女を派遣してきたのだ。盗難事件の専門家だと聞かされた。

彼女が来たのはちょうど設営が終わり、宝石展が始まる前のタイミングだった。

彼女は数日間に渡って設備やレイアウトを確認し、父の施したセキュリティに^{たいこばん}太鼓判を押した。これなら怪盗ホープが来ても盗むことはできないでしょう、と。

もちろん、このときはたとえ話として怪盗ホープの名を出しただけだった。それがどういう訳か、本当に予告状が届いてしまったのだ。

2月1日のうちに改めて警察による会場設備の見直しが行われた。

警察の出した結論は犬吠埼さんが出したものと同じだった。セキュリティは完璧。それにそもそも、怪盗ホープは今まで予告状など出したことがないので、今回の予告状が本物かどうかはわからない。

なら警察がいる必要もないと思ったのだけど、会場を確認しに来た黒岩鋼^{くろいわこう}という刑事は、念のため刑事を何人か会場に張り込ませると言い張った。

それに警察嫌いの姉さんと、それから父が反対して、結局は黒岩さん一人だけが会場に張り込むことになった。

警報の誤作動

刑事・黒岩さんが来てから間もない2月3日。

別館の火災報知器に誤作動が起きた、と聞いた。嘆きのダイヤがある本館でなければ問題ないだろうと思って、あまり気に留めなかった。

月長の異変

展示会が始まる少し前から、私には気になっていることがあった。

月長のことだ。

月長はときどき酷^{ひど}くぼんやりとしている。それに何より、この頃は全然スマホを確認していないのだ。心配性の月長のことから、仕事の様子が不安でスマホを確認するのが普通のはずなのに。

月長の異変に気付いているのは私だけのようだった。たぶん年が近いのと神経質なところ（私はお金についてだけだけど）が似ているからだろう。

2月9日のことだ。

気分転換に近くの公園まで散歩して、本館に戻ってきたときにぼったりと日長兄さんに出くわした。どうも、煙草休憩の帰りのようだった。

兄さん、あと黒岩さんもだけど、よく手ぶらで展示会場（メインホール）から出ていくのを見かける。たぶん普段から煙草休憩をとっているのだろう。

兄さんは私が何かに悩んでいることに気付いたらしく、自販機で缶ジュースを買って渡してきた。無駄遣いだからいらないと言ったのだが、聞かずに押し付けてくる。一度渡されてしまえば、それを私が無駄にはできないとわかっているのだ。

仕方なく私が缶ジュースを飲んでいると、兄さんは尋ねてきた。

「どうしたんだよ？ 暗い顔して」

「ちょっとね……。兄さんは、月長のことどう思う？」

「どうって、別に普段と変わらないんじゃないかねえか。いつもより落ち着いてるぐらいだろ」

「そうなんだけど……。むしろ、落ち着き過ぎている気がするの」

私にとっては明らかに変なのだが、口に出してみると別に大変な感じはしない。兄さんも重くは受け止めなかったようだった。

「まあ、あんま考え過ぎても仕方ないだろ。月長だって大人だしな」

そう言って煙草のケースとライターを渡してくる。
「久しぶりに吸ってみたら気分転換になるんじゃないか。いらなかったら後で返してくればいい」

渡されると無駄にはできないのが私の弱いところだ。

翌日の2月10日。お昼過ぎに本館を抜け出して中庭で煙草を吸うと、やっぱり苦手な味がした。大学のとき吸っていたのだって、ヘビースモーカーの友達がよくくれたからというだけで、別に好きだった訳ではないのだ。

でも、苦い味が口の中に広がると、不思議と少しだけ気分がマシになった気がした。

嘆きのダイヤが紅に染まる

事件当日の2月13日。

私は13時前に展示会場へ向かった。本館の金庫室に貴重品をしまい（この金庫室は私達家族の他にも、宝石展スタッフ、それから警備担当の犬吠埼さんと黒岩さんも使用している）、嘆きのダイヤが展示されているメインホールに向かう。

メインホールの唯一の出入り口であるセキュリティゲートには警備員が二人いるので、片方に免許証を見せて本人確認をしてもらう。それからスマホと指輪を小物入れに置いた。ゲートが金属検知器を兼ねているからだ。

ゲートをってからスマホと指輪を受け取る。

指輪は小さなダイヤが付いたもので、父の発案で宝石展の間は、家族の全員がダイヤの付いた装飾品を身に着けることになっていた。ただし、私のはレンタル品だ。どうせ宝石展の間しか使わないものを買うのは無駄だと思ったのだ。

まだメインホールに来ていないのは兄さんだけだった。

挨拶をしてから自分の持ち場につく。持ち場と言っても、展示会中はできるだけメインホール内にいて欲しいという父の要請に従って、ホール内で適当に立っているだけだ。

宝石の解説が欲しいというお客さんがいれば兄さんに、宝石を買いたいというお客さんがいれば月長に話を繋ぐことになっている。私も堇青姉さんも宝石には詳しくないのだ。ダイヤなら衝撃と熱に強いという、ふんわりとしたイメージがあるぐらいだった。

15時頃に気分転換に本館を出た以外は、ずっとメインホールの中にいた。

16時半過ぎ、誰かから着信があったらしく、月長がスマホで通話しながらメインホールを出ていった。

その後は特筆^{とくひつ}すべきこともなく宝石展は終了し、後片付け中の19時21分。メインホール内にいるのは私達家族と、刑事である黒岩さんだけだった。

兄さんと姉さんは何かを話している。

月長はぼうっと嘆きのダイヤを見ていた。なんだか様子がおかしい。

もちろん気のせいかもしれない。でも、一応声を掛けようとしたとき――。

何かが軋^{きし}むような音がした。聞き慣^なれない変わった音だ。

それからすぐ、ふっと館内が真っ暗になった。

停電か、と思って辺りを見回してすぐに異常に気付く。

嘆きのダイヤが紅に輝^ないている。

闇に浮かぶように、嘆きのダイヤが光っている。

小さいときに聞いた噂^{よぎ}が頭を過る。

嘆きのダイヤは触れたものの魂を吸い殺す――。

馬鹿げているとは思うのだが、ぞわりと鳥肌が立つ。

「やめろ、やめてくれ！」

父の声だった。何かに取り憑^つかれたように叫んでいる。

その少し後、轟音^{ごうおん}が響き渡った。何か巨大なものが床に叩き付けられる音。

気付けば、もはやその役目を終えたとも言えるように、嘆きのダイヤは光るのをやめていた。

しばらく経って館内に光が戻る。

そこで私――いや私達が目にしたのは、落下したシャンデリアの下敷きとなっ^{ことき}て事切れた、父・阿望剛の姿だった。

私にできること

家族の誰かが父を殺したとは思えなかった。

しっかり者で家族のまとめ役の堇青姉さん。少し適当なところもあるが面倒見の良い日長兄さん。繊細だが人一倍責任感のある月長。

私にはこの中に犯人がいるとは思えない。

でも、警察がそれを信じてくれるとは限らない。

こういうときどうするべきなのか、私にはわからなかった。

でも――私にはわからなくても、弁護士である姉さんならわかるかもしれない。ひとまず姉さんに話を聞いてみることにしよう。

そんな風に考えていた事件の翌日、探偵・犬吠埼さんから連絡があった。

探偵は言う。

「翡翠さん、いいですか？ この事件の真相を探ってはいけません。詳細はお話しできませんが、解けば解くほどこの事件は解決不能になりかねません。くれぐれも慎重にお願いします」